

アズマヒキガエルが神居古潭付近 に持ち込まれた経緯について

八谷和彦

〒074-1273 北海道深川市音江町二丁目 6-46 深川ひきがえるバスターズ

北海道内における国内外来種アズマヒキガエル*Bufo japonicus formosus* (以下、ヒキガエルと略記)の分布域のうち最も広いものは、石狩川の中下流に沿って広がる分布域である(北海道環境局自然保護課,2020)。この分布域内でのヒキガエルの侵入・定着について初めて言及した報告は、斎藤ら(1996)であり、1995年に旭川市神居町神居古潭において発見したという記録である。報告では、「(隣接する深川市音江町の)更進に住んでいた方(以下、O氏と仮称)が10年ほど前に埼玉県から持ち込み、神居古潭の池に放した」(括弧内は著者加筆)とされている。その後は石狩川沿いに上流や下流域へ分布を拡大し(斎藤ら,2014)、現在は石狩川河口域まで到達している(徳田,2014)。また、遺伝子解析による侵入源の推定(Suzuki et al., 2020)からも、この分布域のヒキガエルは関東地方から人為的に導入されたものである可能性が高いと考えられている。しかし、導入時期については、斎藤ら(1996)からは1985年頃と読み取れるが、その後、斎藤(2002)は1980年頃、さらに斎藤ら(2014)は1975-80年頃とするなど明確でない。

著者は2010年から深川市音江町に住み、多くの住民に接してきた結果、かつてのヒキガエルの人為的導入は、年配の住民らに広く知られていることが分かった。しかし、O氏は既に亡くなり、当時を知る人達も高齢となって曖昧な記憶しか残っていないので、今回3人の方から聞き取った結果を整理し、持ち込みの経緯を書き留めておきたい。

【話を聞いた人】

(1)K氏(1938年生まれ。今はないO氏宅の近くで農業を営んでいた)。(2)C氏(1947年生まれ。秩父別町の農家)。(3)T氏(1958年生まれ。O氏宅跡の隣の農家)。

【持ち込んだ時期・回数】

①K氏談

O氏は勤めていた土建会社に派遣されて、冬期間は埼玉方面へ季節労働に行っていた。1975年時点で既に数年前から行っていた様子であり、2000年頃まで毎年

行っていたようである。最初の頃は毎年のようにヒキガエルを持ち帰っていたらしいが、最後のほうになると既にヒキガエルが地元に着いてきて持ち帰る意味がなくなり、持ち帰るのはやめていた。

②T氏談

1980-84年にO氏とともに季節労働に出て、春に同じ車で帰郷したことがあり、その際、蛸壺のような容器にヒキガエルを入れて車の後ろに積んでいるのを見たことがある。一回きりでなく何度も運んでいる様子だった。

③C氏談

1972年か1973年、そのころ勤めていた会社の先輩に連れられてO氏宅を訪れた際、風除室のようなところでヒキガエルが放し飼いにされているのを見た。

以上3氏の話から、O氏は1972年頃かそれ以前から何度もヒキガエルを持ち帰っていたものと考えられる。このことは、旭川市への人為的な移入が複数回にわたって行われた可能性があるとしたSuzuki et al. (2020)の考察とも矛盾しない。

【捕獲した場所】

①T氏談

季節労働の宿泊所は埼玉県杉戸町にあり、作業現場は埼玉県内の幸手町(現幸手市)、春日部市、草加市、久喜市、坂戸市、白岡町(現白岡市)、吉川町(現吉川市)、および千葉県の野田市など、知っている範囲でも8カ所あった。会社は護岸工事や河川改修などを請け負っており、ヒキガエルがいてもおかしくない作業現場もあった。O氏はヒキガエルを見つけた作業現場か車で行けるその他の場所で、仕事が休みの日にヒキガエルを捕っていたらしい。

この話から、捕獲場所は特定できないが、関東地方のどこかであったことは間違いない。何年にもわたって何度も持ち帰っていることやT氏が話した地名がある程度の広がりをもっていることから、捕獲場所が複数であったことも十分考えられる。複数地点であることは、Suzuki et al. (2020)においても、旭川市個体群の有する高い遺伝的多様性から示唆されている。

【放した場所】

①T氏、K氏談

持ち帰ったヒキガエルは、自宅やその敷地内で飼育した後、次の季節労働に行く前に、旭川市神居町神居古潭にある実家の溜池に放していた。池には最初フェンスを

12 アズマヒキガエルが神居古潭付近に持ち込まれた経緯について

していたようだが、そのうちフェンスはなくなった。ヒキガエルと一緒に持ち帰ったライギョやナマズの類も放したようだが、定着しなかった。

②K氏談

当時、近くの国道12号線沿いにはたくさんの果樹農家が売店を出しており、そのうちの一つの休憩スペースでO氏はヒキガエルを展示していた。観光バスの運転手などが時間を潰す場所に水槽を置き、中にヒキガエルを10～20個体入れて見せ物にし、ほしい人にはあげていた。もらった人の一人がK氏の知合いで、その人は道北の浜頓別町の自宅で飼ったあと近所に放したという。更進のK氏宅でも、何かの時にもらってきたヒキガエル2個体を飼育したが、飼育をやめる際、家の周りに放した。

これらのことから、ヒキガエルは更進のO氏宅付近と神居古潭の溜池でまとまった個体数が放されたり逃亡したりしたほか、国道沿いの売店などを通して多くの人に渡り、各地で野に放たれた可能性がある。

[持ち込んだ目的]

①K氏談

皮を剥いて塩焼きにしたヒキガエルを酒の席でO氏が食べているのを見たことがあるが、食用としてヒキガエルを本州から持ち込んだようではなかった。

②T氏、K氏談

最初は他に何か用途があって売れると考えたかもしれないが、北海道にはいない珍しい生き物として皆に見せて、ほしい人にあげたいというのが実際の動機だったらしい。

これらの話から類推すると、営利や自然環境を意識した導入ではなく、むしろ生き物に対する単純な興味や好奇心を皆と共有したいという気持ちが動機ではなかったかと思われる。

[環境意識について]

①K氏談

当時は現在のように外来生物を問題視する人達はいず、見せられた人達も“珍しい”、“気持ち悪い”、“でかい”といった反応ばかりしていたので、何度も持ち込むことになったらしい。ヒキガエルは2000年頃までには地域に定着し、住民の知るところになっていたはずであるが、O氏自身はそれを喜ぶほどではないものの、悪いことが起こっているとは考えなかったようだ。

②C氏談

1972年か73年にO氏宅でヒキガエルを見た自分は、年長の先輩から“自分が生きていない遠い将来、このカエルが問題になっているかもしれない心配だから覚えておけ”と言われた記憶がある。

環境に関する知識や倫理観は、高度経済成長期であった当時と現代とでは大きく異なり（内閣府,2006;内閣府,2019:ほか）、C氏の先輩のように考える人は当時かなり稀であった。しかし、いまだに外来生物や生物多様性に関する理解は農村部まで行き渡っているとは言い難いと著者は感じている。従って、現在の尺度で当時を評価することは差し控えたい。考え方の違う誰に対しても今言えることがあるとすれば、“当時の行為は今になってみれば失敗だった”くらいしか思い浮かばない。

引用文献

- 北海道環境局自然保護課.2020.アズマヒキガエル目撃情報調査の結果.<<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/alien/toad/azuma-result.htm>>(最終更新日Apr.8, 2020.)
- 内閣府.2019.環境問題に関する世論調査.<<http://survey-gov.online.go.jp/r01/r01-kankyuu/index.html>>(Dec.24,2020アクセス).
- 内閣府.2006.自然の保護と利用に関する世論調査.<<http://survey-gov.online.go.jp/h18/h18-sizen/index.html>>(Dec.24,2020アクセス).
- 斎藤和範.2002.北海道に持ち込まれたカエル類,p.232-234.日本生態学会(編)外来種ハンドブック.地人書館,東京.390p.
- 斎藤和範・青田貴之・八谷和彦・中川祐樹・ざりがに探偵団ビッキーズ.2014.石狩川中下流にみられる国内外来種アズマヒキガエルの分布状況と防除活動.日本爬虫両棲類学会第52回大会講演要旨 爬虫両棲類学会報2014(1):57.
- 斎藤和範・武市博人・南尚貴.1996.北海道におけるアズマヒキガエル*Bufo japonicus formosus*の新分布地.旭川市博物館研究報告 2014(2):21-23.
- Suzuki D., Kawase T., Hoshina T., and Tokuda T. 2020. Origins of nonnative populations of *Bufo japonicus formosus* (Amphibia: Bufonidae) in Hokkaido, Japan, as inferred by a molecular approach. *Current Herpetology* 39: 47-54.
- 徳田龍弘.2014.石狩川河口及び周辺域における外来種カエルの分布確認について.北海道爬虫両棲類研究報告 2:1-4.